

コイ科魚類咽頭歯遺存体から見える 先史時代の漁撈と稲作との 関係に関する一考察

A Speculation on Relationships between Freshwater Fishing and Rice Cultivation in Prehistoric Ages from a Viewpoint of Tooth Remains of Carps

中島経夫

NAKAJIMA Tsuneo

はじめに

①コイ科魚類の咽頭歯

②コイ科魚類の遺存体

③コイ科魚類の遺存体から考える

④淡水漁撈と稲作の関係についてのモデル

まとめと課題

【論文要旨】

コイ科魚類の咽頭歯がもつ生物学的特性から、遺跡から出土する咽頭歯遺存体を分析することによって先史時代の人々の漁撈活動の様子を知ることができる。日本列島では、縄文時代からイネの栽培が始まり、弥生時代には灌漑水田での稲作が始まる。淡水漁撈の場と稲作の場が重なりあってきた。西日本の縄文・弥生時代の遺跡から出土する咽頭歯遺存体についての情報がある程度蓄積し、淡水漁撈と稲作の関係について述べるできるようになった。西日本の縄文・弥生時代における漁撈の発展は、稲作との関係から、0期：水辺エコトーンでの漁撈が未発達段階、I期：水辺エコトーンでの漁撈が発達する段階（Ia期：原始的稲作が行われていない段階、Ib期：漁撈の場での原始的稲作が行われる段階）、II期：稲作の場（水田）での漁撈が発達する段階、に分けることができる。長江流域では、Ia期に漁撈の場（水辺エコトーン）でのイネの種子の採集が加わる。長江流域の漁撈と稲作の関係については、咽頭歯遺存体から多くを述べることはできない。というのは、これまで、中国での咽頭歯遺存体についての詳しい研究は、河姆渡文化期の田螺山遺跡の例をのぞいてまったくない。今後、新石器時代の遺跡から出土する咽頭歯遺存体の研究が進むことによって、漁撈と稲作の関係や稲作の歴史について言及できるはずである。

【キーワード】 水田、コイ科魚類、咽頭歯、水辺エコトーン、稲作